保育のヒント～「科学する心」を育てる～

水と色の面白さへの気づき／学校法人深沢学園　さがみひかり幼稚園（神奈川県）

皆さんの園の子どもたちは、雨の日や雨上がり、どのように過ごしていますか？

今回は、子どもたちが雨を利用し色遊びを楽しんだり、雨の水たまりから色がにじむ様子に「面白さ」を感じ発見したりして遊ぶ姿に注目した事例です。色と水の不思議さを感じ、雨への興味を深めていく過程に「科学する心」が芽生えていく姿を捉えることができます。

色を感じる～水と色の不思議～／5歳児

色の世界との出合い「雨を使ったにじみ絵遊び」5月

絵を描くことが大好きなAちゃんが、自由画帳にマーカーペンを使って絵を描いていた。
「先生見て。ここ、変な色になっちゃうの」

丁寧に色を塗った絵の中で、マーカーペンの色と色が重なって混ざり、色の変化が起きていた。Aちゃんは、色の変化を嫌がり、自分の思い通りの色に仕上げることができないと困っていた。そこで、保育者は、「色の変化」の不思議や面白さを子どもたちに知ってほしいと願い、マーカーペンと絵具の環境を用意した。子どもたちは“にじみ絵あそび”を楽しむ姿が見られた。

季節は梅雨。子どもたちは、マーカーペンで色を付けた画用紙を雨で濡らし、「色が混ざった！」「もっと濡らしてみよう」「こっちは黄緑になったよ」「綺麗な色になったね」と、雨でマーカーペンが溶け、色が混ざることを楽しんでいた。

次に、米粒大の絵具をのせた画用紙を、マーカーペンの時と同様に雨に打たせてみる。ところが、絵具の場合はマーカーペンの時のように簡単には混ざらなかった。子どもたちは、「雨が少ないと混ざらないのかな」「絵具は強いんだね」「もっといっぱい雨降ってこないかな」「もっと強い雨になってほしい」と口々に言う。なかなか画用紙に絵具がにじんでいかない様子から、“絵具は強い”“強い絵具には強い雨が必要”という考えに至った。

Bちゃんが、屋根の端からまとまった大粒の雨が落ちてきていることに気づく。試してみると、大粒の雨を受けて、絵具がにじんでいった。子どもたちは、「雨がいっぱいになったら（絵具）が溶けてきたよ」「僕にもやらせて」「マーカーより難しいね」「また次も変わってきたよ」と、口々に言う。

さらに絵具は“雨の量が多いとにじむ”ということが分かると、Cちゃんは地面の水たまりに注目した。たくさんの雨が集まっている水たまりに画用紙を付けたら、きれいに絵具が混ざるだろうと考え試す。
すると、画用紙に付いていた絵具は水たまりに流れてほとんど消えてしまった。しかし、すぐに流れた絵具で水たまりに色が生まれていることに気がつき、喜ぶ。その様子を見た他の子どもたちも次々と真似をして試していた。

考察

子どもたちは、にじみ絵遊びをしながら、色が混ざると変化し、新たな色ができることに気づいていった。そして、この出来事を楽しみ、「もっとやりたい」とつぶやいていることから、色が混ざると変化し新たな色ができるという「色の世界」の不思議が、子どもたちにとって興味深い「面白い」ことへと転換している。さらに「きれいになった」とのつぶやきから、色の変化を「美」と捉えたのではないだろうか。

✤ 雨との関わり

●「新鮮な気持ちで雨を見る」

雨の日が続き、子どもたちは雨に対して嫌な気持ちを抱いていた。そこで、雨を観察したり、雨に触れたりして、雨に親しみをもてるよう、日々の保育の中で投げかけていったことで、次第に子どもたちの雨に対する関心が強くなっていった。

子どもたちは、「雨が見える！」「けっこう強い雨だね」「ザーザー降ってるからザーザー雨」「今日はパラパラ雨だね」など、雨の音や強さの違いから、その日によって異なる降り方をする雨に、名前をつけるようになっていった。そして、雨の音に関心をもった子どもたちは、保育室の中にある身近な思い思いの物に雨をあて、音を試していった。ドラム缶に雨があたると、「パチパチ聞こえるー」「花火の音みたい」「お肉が焼ける時の音みたい」「こっちは太鼓の音」「新聞はやっぱり濡れちゃったね」「カップに雨が入ってる！」「大きいバケツにしたら雨がいっぱい集まるかな」など言葉にする。

●「雨上がりの園庭探検」

雨を観察する中で、少しずつ雨に対する関心や、親しみも出てきた子どもたち。それまでは子どもたちが戸外遊びを安全に、十分楽しむために、水たまりの残る園庭では遊べない決まりがあった。しかし、もっと雨を楽しんでほしいと願い、水たまりの残る園庭に出て、遊んでみることにした。

大きな水たまりを踏まないように歩いたり、小さな水たまりを飛び越えてみたり、子どもたちはすぐに水たまりを迷路に見立て遊び始めた。初めての雨上がりの園庭では、たくさんの発見があった。

発見＜雨粒＞

木の下まで行くと「雨は止んでるのに、雨が降ってくるよ！」と不思議な発見があった。見上げてみると、「葉っぱがびしょ濡れ」「葉っぱから降ってきたんだ」と、葉っぱに付いた雨粒に気がついた。そして、風が吹いてその雨粒が落ちてくるのを待って、「雨みたい」「冷たい！」と、その感触を楽しんだり、雨粒が落ちるように木を揺すったりしていた。

発見＜逆さまの世界＞

「ねぇ見て！水たまりに幼稚園が映ってる！」

一人の発見から、“逆さまの世界”探検が始まった。「こっちにはブランコが映ってるよ！」「バラ組はどこから見えるかな？」「ここからだと見えないよね」「もっと近くに行ったら？」「こっちの方かな？」

そうして、どこに何が映るのかを探究していくうちに、遠くと近くで見るのでは、水面に映るものが違うということや、目線の高さによっても、映るものが違うということに気づいていった。

ここでの発見を応用して、“水たまりじゃんけん遊び”が始まった。大きな水たまりを挟んで立ち、「じゃんけん、ぽん！」とじゃんけんをするのだが、その相手は現実にいる友達ではなく、“逆さまの世界”にいる友達、つまり水たまりに映る友達の姿なのである。

相手がよく映る場所を互いに見つけ、普段とは一味違ったじゃんけんを楽しんでいた。また、逆さまの世界にいる自分の姿とじゃんけんを始める子どももおり、「自分とじゃんけんをするとずっとあいこだ！」「面白いー」と、何度も繰り返して笑っていた。

保育者は、子どもたちが感じたことを受け止めたり、面白がっていることに共感したりなど、共に遊びを楽しんだ。

考察

保育者が、雨の日は園内で過ごすという枠組みをはずし、子どもが雨に対して感じた面白さを共に感じ、面白がったことで、子どもたちは水たまりの水面に映る逆さまの世界と出合ったり、雨粒が水たまりに落ちると波紋となることを発見したりなど、「雨の世界」を知ろうと探究したのではないだろうか。

このように、雨とじっくりかかわることで、雨の存在が「嫌なこと」から「面白いこと」へと変化していく子どもたちの心の変化が感じられた。

無断転載を禁ず。引用する場合は右記を必ず明記願います。「(C)公益財団法人 ソニー教育財団　ソニー幼児教育支援プログラム 幼児教育保育実践サイト https://www.sony-ef.or.jp/preschool/ 」